

第 40 回 AAE フロリダ学会講演抄録報告

日本歯内療法協会雑誌 第 4 巻第 1 号

(昭和 58 年 11 月 25 日発行)

AAE 出席 “JEA ツアーに参加して”

吉 田 直 人

(NAOTO YOSHIDA)

1983年4月20日から24日までの5日間、米国フロリダ州ハリウッドにおいて第40回AAE総会が開催され、世界各地より多数の会員を集め活発な討議が行われた。AAE総会は1943年発足以来、世界に先がけて歯内療法の専門学会としてすぐれた研究および臨床における成果を発表して来ており、今日では名実ともに世界の歯内療法の国際学会としての役割を果たしている。今回の総会には、日本人出席者が少数であったにもかかわらず、AAEのはからいで同時通訳が行われ、われわれにとって大きな成果をあげることができた。AAEに対して心より感謝するしだいである。内容はもちろんのこと、参加人数やその規模からして、わが国の歯科界におけるどの学会とも比べようもないが、将来への希望としてAAE国際学会を日本において開催できれば、どんなに素晴らしいことだろうか。それには、主催国としての内容の伴ったJEAの体制づくりが前提条件になるのは申すまでもない。来年度はカナダのトロントにおいて行われる予定である。わたくしがAAE総会に出席したのは今回が3度目であり、ようやく学会の雰囲気にも慣れて来たようだが、なにぶん「言語障害」によるストレスには勝てず、自病のマーゲン・ゲシュールの悪化に悩まされ、好きな酒も飲めず残念な思いをしたのが正直なところである。外国人の間に互して、いいたいことを十二分にいえることを夢見ながら帰国の途についた。少々ドグマ的な解説になるが、AAE総会の印象と個人的な体験について述べてみたい。

米国における学会の運営で感ずること

わたくしはAAE総会終了後、ボストンで開催

された第1回 Periodontics and Restorative Dentistry に関する国際シンポジウムにも出席する機会に恵まれ、米国における学会の運営と役割について多少感じたことがあったので、日本の学会と比較しながら考えてみたい。まずAAE総会で気づくことは、回を追うごとに喫煙者がめっきり減ったことで、今回は喫煙者を会場内で発見することは不可能であった。デンティスト以外のスタッフが、それもほんの少数の人が、展示場の隅で遠慮がちに喫煙している程度であった。喫煙の件ではわが国にとって不名誉な話を聞かされた。このことはすでに一部のマスコミで取り上げられた話題であるが、昨年米国で開催された国際癌学会の会場で、日本の著名な国立大学教授がウッカリかあるいは無神経からかは明らかではないが、会場内で喫煙したところ、翌朝、事務局受付の前に喫煙者の国家、地位、大学名、氏名と喫煙中の教授の写真が貼り出され、抗議文が提示された。わたくしはこの話を現在研究で渡米している某教授から直接伺い、身につまされる思いがした。これに比較して日本の現状はどうであるか、セミナー等の会場で、灰皿も用意してないと悪態をつくドクターがいることは嘆かわしい。まさしくわが国は喫煙天国であることを痛感したわけである。これは単なる喫煙だけの問題ではなく、臨床と研究がちぐはぐな日本の学会を象徴している話のように思われた。

AAE総会は専門部会であるにもかかわらず、千数百名の参加者を集め、最終日まで活発な討議が行われ、参加者は歯内療法における最新の研究内容を直接聞くことができることは羨ましい話である。会をここまで発展させて来たのは、歴代の会長の指導力と一般会員の学会に対する情熱にほかならない。初代会長の W. Clyde Davis をはじめ、Louis I. Grossman, J. Henry Kaiser,

John I. Ingle, I.B. Bender 等の錚々たる学者がAAEの会長として従事して来たのである。また、会長の会務も学会の歓迎の辞から招聘した演者の紹介に至るまでハードスケジュールの激務であり、開会式の挨拶のみを務めとするわが国の会長とはいささか趣が違い、学会を成功させるがための努力が随所にみられ、われわれのような諸外国からの一般参加者に対しても“May I help you?”をまじえながら時間が許す限り話しかけ、各会場を精力的に回っている会長の姿には、深い感銘を受けた。学会が単なるチーテル・アルバートの発表会になってしまい、臨床を軽視し、医局内で開業医を愚弄するような大学の体質を変えない限り、日本の学会はますます一般開業医にとって無用な存在になって行くと思われる。わが国におけるどの学会をとっても、会員の大多数が一般開業医であり、財政の大部分を開業医によって支えられている実状でありながら、大学のみを中心にした学会の運営には納得しかねる点が多い。AAE 総会およびボストン学会を通して強く印象に残ったことは、大学や研究室の研究成果が一般臨床と深く関わりを持ちながら、有機的に結合していることである。両学会において基礎的な研究発表に対する一般臨床医の質問の場合にも、演者が基礎学者であるにもかかわらず、その研究の臨床学的な意義とこれからの応用面に関して適切なコメントがなされ、互いに意見の交換が十分に行われることは、研究者と臨床家が対等な立場に立ち学会を支えていることを示している。

このような観点から、わが国で他に先駆けて開業医と大学とが結合した、理想的な学会づくりを目的に発足した日本歯内療法協会（JEA）の今後の活動は、いろいろな意味で重大な責務を負うものである。AAE 総会は専門部会であっても、常に時代に即応した問題意識を持ちながらプログラムを組んでおり、毎年米国における社会環境に対する歯科界の対応について討議がなされ、学会が社会から遊離したままでは存続できないことを明確に提示しているのである。余談になるが、先般日本補綴歯科学会の新会長に就任した平沼謙二教授が挨拶の中で、今後現今の歯科医療制度について、学会として取り上げる方針を立てたことは遅

すぎる感はあるが、高く評価すべき事であらう。このような機運が他の学会にも波及し、日本における歯科界の立場を向上させてほしい。

歯内療法専門医の内容について

最近、学会やセミナーの会場でよく耳にすることで「日本の歯科医療は米国に比較してもはや教わるべき内容はなく、日本独自の歯科医療を確立すべきであり、戦後米国の歯科医療に追従して来たのは誤りであった」というような意味合のことを堂々と主張する先生方が現れ、また一般開業医の中にもこれに同調する風潮が強まって来たことをどのように解釈してよいのか、わたくしは途惑っている。代わり身の早いのは日本人の特性であるが、自分の technique error を忘れ失敗は全て米国の歯科医療に追随して来たのがその原因と考えるのは性急すぎるのではないか、また逆に表面的な現象だけを重視しテクニックのみに走った結果、それに裏づけされた学理を知ることなく、もはや教わるのがないと結論づけることは、学問に対する不遜の現れである。

わたくしはAAE 総会中に、第33代AAE 会長であったRobert A. Uchinと、大谷満先生の対談に同席させて頂き、米国における歯内療法専門医の内容について興味ある話を伺うことができ、いろいろな意味で反省させられる点が多々あったので、大まかではあるが紹介することで会員の判断を仰ぎたい。具体的なUchinの話に入る前に、ボストン学会でのあるペリオ専門医の症例報告を紹介することで、米国の専門医の内容の一端を知ることができると思う。症例で報告された患者の主訴は、日本でのペリオ患者が持つ歯肉の炎症ではなく、歯頸部歯肉の不揃いに対する不満であり、美しい歯肉形態の再現を要望したまったく審美的な要素が主眼であった。もちろん歯肉は臨床的には健康であるのはいうまでもない。このような症例に対して、日本ならば歯肉が健康で咀嚼に異常がなければ、あえて処置する必要はなく、患者を説得して帰すことが最良の歯科医療になると思われる。その患者の歯肉の不揃いはわたくしからみるに、前歯部は別として臼歯部は咬合の不揃いか

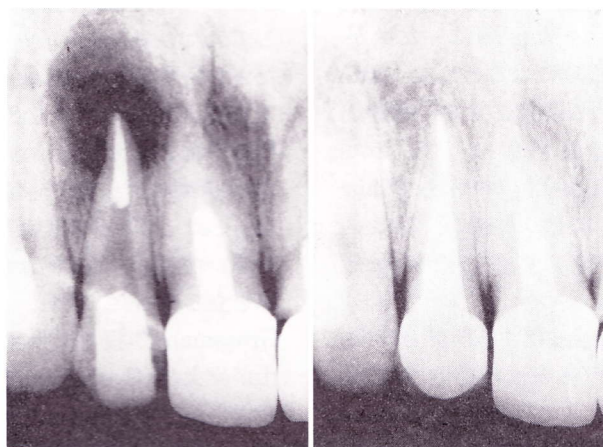
ら起因していると思われた。日本的な治療方針はさて置き、患者は自分の歯頸部歯肉の形態に対して、精神的苦痛を抱えているのは事実であるから、その願望に何とか答えるのがデンティストの使命である。ペリオ専門医は、この症例に特別な periodontal surgery などの手術を施行することなく矯正をダイナミックに応用しながら、各歯牙を up right, depress させながらバランスのとれた咬合平面を作ること、前歯部から臼歯部に至る見事に美しく揃った歯頸部歯肉を作り上げたのである。術前と術後の写真を比較すると別人の口のように、多数の同様の症例をみたとき日本のペリオとは比較にならず、次元の違うところで論争しているように思われた。

わが国においても、確かに米国の歯科水準に匹敵する臨床医が少数いることは事実であるが、その少数の高いレベルを持って米国と比較するのは、的をそれた議論になる。米国の高い歯科水準がすべての患者に施されているかどうかは別とし

ても、高度な歯科医療を実施できる歯科医師の層が厚いことは認めざるを得ない事実である。自国にだけ通じるモノサシで、他国を測ることは時として見当違いな判断を引き起こしかねない。

Robert A. Uchin が米国における歯内療法専門医の仕事として列挙した症例をあげる前に、わたくしの不十分な英語力での解釈であることをお断わりしておく。

- ①まず、Dr. Uchin の dental office に来院する患者の平均年齢は 64 歳である
- ②歯根が著しく彎曲しているもの
- ③根管が石灰化しているもの
- ④歯根の内部および外部吸収が大きいもの
- ⑤打撲あるいは炎症のため根尖歯根が吸収されているもの
- ⑥病巣が極端に大きいもの
- ⑦口が非常に小さく、治療困難な患者
- ⑧精神分裂症などの special patient care の患者



根充直後

術後1年6ヵ月

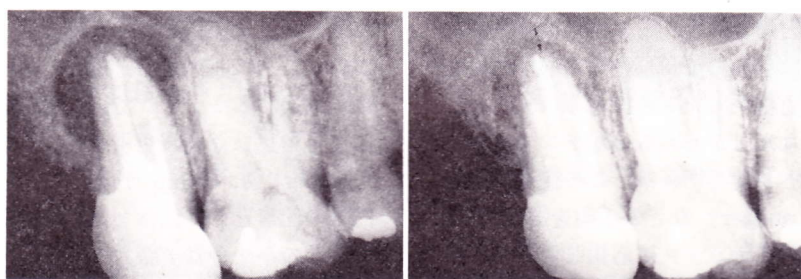
図1 症例1



術前

術後1年8ヵ月

図2 症例2



術 前

術後1年

図 3 症例 3



術 前

術後9ヵ月

図 4 症例 4

話をまとめると、日常わたくしたちが行っている根管がすぐ開拡できるような症例は、大半が general practitioner の範疇になるわけで、Endodontist がとりあつかう症例は、さらに厳格なところに基準を置いているようだ。ここで、わたくしが参考のために持参した症例の中から Uchin が G.P と Endodontist にその内容に応じて症例を区分して下さったので、そのうち一部を恥をしのんで提示してみたい。

なお、判定基準になる症例に関する所見と術式、ならび治療経過についての報告は省略させて頂く。これらのうち、症例 3、4 の症例が Endodontist の範疇内容に入るものとして選定されたものである。

偉大な Grossman 教授との思い出

わたくしが Grossman 教授に直接お会いしたのは今回が初めてのことで、なんの先入観も持たず接することができ、教授の別な一面を知る機会に恵まれた。ハリウッ드의学会中、総会の展示場に設営された AAE 案内場において、たまたま昼食時間のため係員が不在であったのか、周囲に散

在したパンフレット類を一枚一枚ていねいに整理していた年輩の紳士がいたので、わたくしはたどたどしい英語で AAE に関する質問を二、三したところ、彼はゆっくりした口調で説明してくれ、数枚のパンフレットをわたくしに渡しながらいよいよ日本から参加したことを感謝すると述べられた。わたくしは「ずい分親切な事務局員であるなあ!」と思いながら、形式的なお礼の言葉を述べ、その場を立ち去った。翌日、ある席で大谷満先生より Grossman 教授を紹介されたとき、昨日の老紳士が偉大な Grossman 教授であることを知り、いささか狼狽し恥ずかしい思いをした。偉大な Grossman 教授と知り会えた機会に、自分の症例に対する良き指導を得ることを期待し、わたくしが自分の症例の X 線写真をおみせしたところ、教授は“わたくしは現在臨床から遠ざかっており、正しいアドバイスを与えることは不可能であるゆえ、貴方にとって参考になるかどうかかわからないので、臨床に関する意見を述べることは勘弁してほしい”と内容のことを話され、症例に関する全般的な感想をつけ加えて下さった。このような態度に接し、いかにも学者ならではの考えであり、わたくしのような一介の開業医に対しても奢るこ

となく、真摯な接し方に深い感銘を受けた。Grossman 教授は今年 82 歳の高齢であるが、側近によると記憶力の衰えは認められず、今でも研究生活に余念がないことを聞かされた。総会終了後、わたくしたち一行はフィラデルフィアのペンシルバニア大学を訪問したが、その際教授自らキャンパスを案内説明し解説と講義をして下さった。大学付属の Continuing education center では、40 数年前に教授が行った抜髄から根管充填に至る臨床術式の映画の映写があり、Grossman 教授による解説が加えられた。これは現在の歯内療法と比較して見劣りするところは全くなく、むしろ歯内療法の基本原則に沿ったものであり、生体の構造を無視したテクニックと、省力化のみに傾向している最近の歯内療法に対する警告であるように印象づけられた。

最後に Grossman 教授はわれわれ一行に対するメッセージとして“自分はペンシルバニア大学

を卒業して現在に至るまで、自宅と大学の研究室を往復する毎日でした。美しいフィラデルフィアとペンシルバニア大学をこよなく愛しており、このような環境の下で長年、研究生活に携わることが可能であったことに深く感謝しております。顧みて、わたくしは歯科医師であったことを誇りにしております”と述べられた。表現は平凡だが、重みのあるいつまでも心に残る言葉であった。現在 Grossman 教授は自家用車は使わず、通常路線バスと列車を利用して通勤する毎日であるが、高い名声とは対称的にその生活は質素であるように思われた。わたくしたちはバス停に急ぐ教授の後ろ姿を見送りながら、いつまでもお元気でありますことをお祈りした。

以上の報告は、細部の点で不正確なところがあるかもしれないことをお詫びしておきます。